

さいたま市立大宮北中学校

学校だより 6月号



令和8年5月29日(金)

048(641)1214

048(641)6680(さわやか相談室)

<https://omiyakita-j.saitama-city.ed.jp/>

学校教育目標

『人間性豊かな
実践力のある生徒』

- ◆ たしかな学力
- ◆ ゆたかな心情
- ◆ たくましい身体

いじめの問題について脳科学的に考える

校長 廣江 剛

6月は、市内全ての学校が「いじめ撲滅月間」としています。昨年の学校だよりでも6月号で「いじめの問題」について取り上げました。6月にいじめが増える原因の一つとして、4・5月は、誰もが新しい集団の中で様子を伺いながら生活をしているけれども、徐々に慣れ、新しい力関係が形成され始めることが関係していると述べたことを記憶しています。先日行われた第1回いじめ対策委員会では、代表生徒たちがいじめをなくすために自分達にできることを話し合いました。とても活発な議論が行われ、今年度の取組についてたくさんの候補があがったため、生徒会が吟味して内容について改めてお知らせすることとなりました。



いじめは、子どもの世界だけでなく、大人の社会でも、国や時代を問わず起こっています。なぜ、こんなにもいじめはなくなるのでしょうか。テレビ出演等でおなじみの、脳科学者である中野信子さんは、著書の中でその理由を「人間の脳の仕組み」にあると説明しています。人間は、体が強いわけではないので、太古の昔から「集団で協力すること」によって生き残ってきました。仲間を守るために協力し合う力は、人間にとって大切な能力です。しかし、その力が間違った方向に向かっていくと、自分と考えの違う人などを排除しようとする気持ちが生まれてしまいます。本来は仲間を守るための力なのに、必要のない相手まで攻撃してしまうことがあるのです。これが、いじめの根っこにある仕組みだと述べています。

また、誰かを攻撃すると脳の中で「快感」を感じる物質が出ることも分かっています。SNSでの炎上が止まらないのも、この仕組みが関係しています。「自分は正しいことをしている」という歪んだ思い込みに酔いしれながら、誰かを叩いているのです。いじめをしている側は、自分が間違った行動をしていることになかなか気づきません。本当にやっかいな脳の仕組みです。

では、どうすればいじめを減らせるのでしょうか。中野さんは、「いじめをすると自分が損をする」と感じる仕組みをつくるのが大切だと言っています。なぜなら、みなさんの脳はまだ発達途中で、やってはいけないことと分かっているけど、感情のブレーキがうまく働かないことがあるからです。ここからは私の考えですが、やはり、いじめを見たり聞いたりしたら必ず信頼できる大人に知らせること、一人で悩まないこと、誰かに相談することが最も大切だと考えます。大人の介入により「ならぬものはならぬものなのです」というけじめをつけることが必要だと思うのです。大宮北中学校の先生方は、「先生が介入したことによりいじめがひどくなった」というような中途半端な対応はしません。いじめが完全なくなるまで何カ月でも見守り続けます。そして、保護者の方にも御協力をいただきます。もし、今も辛い思いをしている人がいるならば、どうか先生や保護者を信頼して相談してください。私たち大人は、全力であなたを守り、支えます。

そして、生徒のみなさんが自分たちで考え、行動し、いじめが起きにくい環境づくりをすることはとても大切です。昨年、いじめ対策委員会の発案で「あいさつ運動」を始めてから、1年間をかけて、本校のあいさつの質は、確実に変わったと実感しています。心と心のつながりを感じる機会が増えたように感じています。本年度もみなさんの主体的な取組により、いじめ撲滅に向けた機運がますます高まることを期待しています。6月の風のように、みなさんの心が軽く、柔らかく、安心して過ごせる学校を、みんなで作っていきましょう。(参考文献) 中野信子著「ヒトは『いじめ』をやめられない」